
その辺の神

八二一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その辺の神

【Nコード】

N2209N

【作者名】

八二一

【あらすじ】

神とは案外その辺に居るのかもしれない。人込みに紛れて運命を操っているのかもしれない。貴方の友人が神かもしれない。

(前書き)

神とは何か。

私の中での一つの結論がもしれません。

そしてこの作品は私自身の『転生』という作品に対するカウンター
のつもりで書きました。興味があればそちらもお願いします。

「爺さん、危ねえッ！」

叫びながら一人の男が車道へ飛び込んだ。目の前には老人と、それに迫る大型トラック。

ドンツと老人は突き飛ばされかろうじてトラックから逃れる事が出来るが、男はその場に立ち尽くしている。ほとんど気を失ったような状態なのだろう、微動だにしていない。いや、出来ないのか。

周囲では通行人どもがキヤアキヤアと喚いている。しかし男には聞こえない。

トラックのエンジン音が響く。しかし男には聞こえない。

男には何も聞こえない。

ヤベー、死ぬのかな。

そんな考えが頭によぎった。

痛てえのはやだな……。

男は静かに目を閉じた。

「？」

しかし、いつまで経っても来るべきはずの衝撃がやって来ない。恐る恐る閉じた瞳を開くと、辺りの風景は灰色のフィルターがかか

ったように色褪せ、トラックも何もかも動きを止めていた。まるで時間そのものが止まった様に。

「な、なんだ……？」

恐れや驚き、その他の色々な物がいつしよくたな感情がやって来たが、何故かそれ以上に好奇心が強かった。男はゆっくりと目と鼻の先にあるトラックに触れてみた。

「何にも感触が無え……」

普段感じる車特有の冷たさが一切感じられなかった。

少し離れた周りの人間に寄り、目の前で手をヒラヒラとしてみた。体はおるか、瞳すら少しも動かなかった。

どういう事だよ……。

「時間が止まったのがそんなに不思議かね」

「!?!」

突然どこかから声が聞こえた。

「だ、誰だ！」

辺りを見回す。しかしどこも動きを止めていて灰色掛かっている。

「!?!じゃあ、!?!。お前さんの目の前じゃて」

見れば男の助けた老人が手を振っている。老人の声からは驚きや恐

れのような物は感じられ無かった。如何にもこの状況が当然であるかのような落ち着いた声だった。

男は老人の元へ駆け寄り尋ねた。

「これは一体……いや、それよりも……。何が何だか……」

だが、聞きたい事が多すぎて一体どこから尋ねたものか。男の頭の中はもう色々な事でぐちゃぐちゃだった。

「待てい」

そんな男に老人はびしりと手をかざして制止をかける。

「お前さんの名前は、おがさゆたか小笠豊……じゃな？」

老人が男に言った。確かに男の名前は小笠豊だ。見事に当たっていた。しかし、そんなことはどうでもいい。

そう思い男が いや、小野が口を開こうとするが何故か口が動かなかった。

「……………！……………！？……！」

漏れるのは声にならない音ばかり。

だが老人はそれには目もくれず左手をヒラリと翻す。次の瞬間、老人の左手には革張りのファイルの様な物が有った。

何だよ、マジックか？じゃあこの状況ももしかしてドッキリかよ！？

「ふむ……どうやら手違いの様じゃのう」

老人はそう言った。

手違い！？何の話だ！

小野の頭にはもはやこの状況に対しての恐れ等は無かった。あるのはよく分からない老人に対する怒りと憤りばかりだ。

「突然でスマンが豊君。君は死んだ」

ハア！？

老人の突然の言葉に声にならない声を上げる。

「ホントにスマンのう、いくら神である儂でも65億人もの運命を支障無く動かすというのは難しくてなあ。こればかりは何千年経っても上手くできんのじゃあ」

もはや小笠の頭には怒りも恐れも通り越した呆れの様なものしか無かった。

今、この爺さんは何と言った？神だった？

小笠は神だとか仏とかは信じた事は無かった。いわゆる無神論者という奴だ。

訳わかんねえ……。

これは小笠の事実上の敗北宣言だった。『時間を止める』、こんな事は人間には不可能だ。加えてそんな状況に自身を神だと言う人間が現れれば、どんな人間でも信じざるを得ない。

神なんて……。

「神なんてよオオツ！」

やっと口が開き、小笠は叫びながら老人に殴りかかった。しかし今度は体の動きが止まる。小笠には理解できた、これが目の前にいる『神』と名乗る老人の仕業だという事を。

「『神なんてクソ食らえだ』……かね？」

心臓を何か杭の様な物で突き刺された様な気がした。

「ああ、神なんてクソ食らえだ……！てめえが神なら何で妹を助けなかつたんだ!？」

小笠が神を信じなくなったのには訳が有る。彼には妹が居た。腹違いで年も離れていたが、彼にはよくなついていた。

だが妹は死んだ。

交通事故だった。先ほどと同じように横断歩道を渡っている時にトラックが突っ込んで来たのだ。すぐに救急車を読んだが、即死だったらしい。

「だから……。だからアンタを助けたんだ！」

「『もう妹と同じように人が死んで欲しく無いから』？」

また言いたい事を読み取られる。まるで頭の中を覗き見られている様に。

「だが君一人が頑張った所で一体何人の人間が助かるんじゃない？この国だけでも一年で最低でも約5000人が交通事故で死んでいるのじゃが？」

酷く気分が悪くなった。確かに神の言うことは正しいと思った。だがこんな事、神が言うべきでは無い。その5000人を死なせている……。いや、殺しているのは誰だ？目の前に居る神自身ではないか。

「てめえが殺してる癖によくもまあそんな事が言えるなあ！」

小笠は叫んだ。体は未だ動かないままだったが言葉で殴るくらいの気持ちで叫んだ。

「だが世界では一日で何千人も死に、また生まれているんじゃない。そうじゃないと世界というシステム自体が崩壊してしまう」

これもまた正しい事に思えた。死ぬ人間が居なくなれば世界は人間で溢れてしまう。それが運命というなら……。……。仕方無いと言わざるを得ないのかもしれない。

小笠は自分が情けなかった。こんな事で諭されてしまう自分自身が。

「……だが、アンタはさっき言ったな。“俺が死んだのは手違いだ”って」

小笠が神に尋ねた。

「そうじゃな。どうやら君は“運命の輪”から弾かれてしまったよ
うじゃ。どうにも運命というのは制御が難しいわい」

神がふうと息をつく。その様子は疲れた老人そのものだった。

「モノは提案なんじゃが……君は神をやる気はないかね？」

ブチンと何かが小笠の中で音を発^たてて切れた。

「ツぎっけんな！神なんてクソ食らえだってさっき言ったろうがッ
！てめえに妹ブツ殺された俺に神をやれだど！？バカにするにもい
い加減にしやがれッ！……！……！……！？」

荒れて暴れだす小笠だが今度は口も動かなくなる。

クソ野郎め！

神はやれやれと肩をすくめる。そして小笠の背後……正確にはトラ
ックの運転手を指差した。

「例えば君を引き殺してしまう、あのトラックの運転手じゃが。幸
か不幸か偶然か、妹を轢き逃げした犯人じゃ」

今度は体が強制的に動かされ、小笠はトラックの運転手を見る。

朗らかに神が笑う。「不謹慎だ」と小笠は思った。しかし声には出さなかった。しかし考える事も知られている事を思い出して、頭の中で謝った。
そう思う気持ちは少しだけだったが。

「今から神の権利全てを君に譲渡する。使い方は勝手に分かるようになる、簡単じゃ。どんな残酷な死に方でも思うがまま。頭で思うだけで済むからな」

神の言うことなんて正直興味は無かった。だがきちんと聞いておかなければ、殺し損ねてしまつかもしれない。

「ああわかった」

小笠がそう言うと、次の瞬間彼の頭の中には様々な情報が一気に流れ込んできた。その中にはこの神の力の使い方もあった。

神の力が全て小笠に渡ると老人はいつの間にか消えていた。

「コイツが由美を……!!」

時の止まった空間で小笠は……新しい神はトラックの運転手を睨み付けた。ブクブクと太った髭面には罪悪感なぞ少しも感じられなかった。神になった今なら分かる。コイツの頭にあるのは保身の事だけだ。「絶対に警察に捕まりたく無い」という気持ちだけ。

「なら、絶対に捕まらない様にしてやるよ」

止まっていた時間が再び動き出す。

トラックはハンドルを切って電信柱に突っ込んだ。電信柱がトラックの上に倒れてくる。ガシャンと運転席がひしゃげる音が辺りに響いた。

野次馬に紛れてトラックに駆け寄ると運転手はシートベルトも着けていなかったのか、ハンドルの軸が胸を貫いていた。が、運転手はかるうじて生きているようだった。

そのうちにボンネットが火を吹いた。誰かが「爆発するぞ！」と言っていた。神にはそれも分かっていた、いや神がそうしたので。

「生きながらにして身を焼かれる苦しみを味わえよ。じっくりとな」

そう静かに呟くと神は再び野次馬の中に消えていった。

(後書き)

私自身は無神論者です。ですがどうしても神を信じたい時もあります。前書きでも言いましたがコレは私の中で一つの結論でもあります。

もしかすると貴方の友達が神かもしれない。

相変わらず文章はクソですが、よろしければ感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2209n/>

その辺の神

2010年10月21日20時53分発行